

日本語学習者を対象とする古典日本語文法テキストの課題(3)

—北京大学出版社『日語古典語法』を例として—

春 口 淳 一

The tasks for Classical Japanese Grammar textbooks for Japanese Learners(3)

—A case study on Peking University Press "NICHIGO KOTEN GOHO"—

HARUGUCHI Junichi

Abstract

The purpose of this paper is to examine what tasks are appropriate for classical Japanese grammar textbooks. It has been made clear that Peking University Press "NICHIGO KOTEN GOHO" also has a lot of problems as a textbook for Japanese learners as well as other Japanese grammar's textbooks "NIHONGO KOTEN BUNPO" and "KANMEI NIHONGO KOBUN KYOTEI". This shows that little attention has been paid to classical Japanese grammar although it has been included in the curriculum of higher Japanese education in China. It is suggested that more suitable textbooks should be prepared for learners.

1. はじめに

海外においては、高等教育機関で日本語を専攻する学習者に対して、現代の日本語文法に限らず古典文法（以下、古典日本語文法）もまた教科として取り上げられることがある。特に中国においては数多くの大学で開講されている。中国の高等日本語教育機関のカリキュラムを研究した湯（1989）、鈴井（1991）、間・岡崎（2003）論文は、復旦大学、北京第二外語学院、華僑大学にその存在を確認している。また長崎外国語大学（以下、本学）の協定校にも、吉林大学、厦門大学、福州大学、首都師範大学などがその実例として挙げられる。

さらに、これら協定校からの要望に応え、2008年度からは本学でも短期留学生を対象とする「古典日本語文法」を開講している。1学期15週からなる講座は、2009年8月時点で3学期を筆者が担当したが、受講生は延べ100名を超え、受講生の出身国・地域もアメリカ、韓国、中国、台湾と多岐に渡る。

1. 1 先行研究

非母語話者向けの古典日本語文法教育を対象とした先行研究としては立松（2000）、金山（2004）が挙げられる。しかし、これらはおおよそ授業報告として位置づけられるものであり、教壇に立つ者を支援する実証的な研究は数少ない。

このような状況下において、春口（2006）ではアンケート調査を基に、学習者のモチベーションを高めるための試みを取りまとめ、その結果を基に、文法項目の定着に擬古文（教師の自作による例文）が有効であることを提唱した。また春口（2007）では、古典日本語を現代語訳する際にみられるミス

テイクを分類・分析し、現代日本語能力が古典日本語の学習に密接に関わっていることを指摘した。さらに春口(2008a)は学習者が持つ古典日本語文法観と彼らに要求される知識とを分析し、両者のギャップを明らかにした。

一方、春口(2008b)が分析の対象としたのは、学習のプロセスを支えるテキスト(武漢大学出版社『日本語古典文法』¹⁾)である。非母語話者が学習の拠り所とするテキストはいったいどのようなのか、助動詞に着目して問題点を探った。さらに春口(2009)では、対象を華東理工大学出版社『簡明日本語古文教程』²⁾に変えて、追従研究を行った。両者は日本語非母語話者を対象としていても、それへの配慮が見られなかった点で共通している。

1. 2 研究目的

本稿では、他の教科書を対象にさらに追従研究を実施する。春口(2008b、2009)で確認された古典日本語文法テキストの問題点が全2作に限ったものであるのか、さらに広く共通したものであるのか確認したい。

また分析の対象項目は『日本語古典文法』、『簡明日本語古文教程』と比較するため、同様に助動詞とする。そもそも助動詞を対象としてきたのは、春口(2007)でミステイクの最大の要因の一つとして助動詞が挙がっており、また春口(2008a)で試験問題中の最頻出項目として助動詞を取り上げられていることが背景となっている。

本稿の掲げる研究課題もまた、春口(2008b)そして春口(2009)に準じる。すなわち、

- ・中国で出版される古典日本語文法のテキストは、助動詞をどのように提示するのか。
- ・使用例文等が、対象が非母語話者であることへの配慮がなされているのか。

の2点である。

2. 調査

今回、調査の対象として北京大学出版社『日語古典語法』を取り上げた。³⁾「古典日本語文法の難点を解析することは、古典文学鑑賞の鍵となる」と題した前言には、「大学日本語専攻者のための古文の基礎課程として編集した教材」とあり、このテキストが日本語非母語話者を対象とした古典日本語文法の入門として編まれたことが汲み取れる。

また調査方法だが、これは春口(2008b、2009)を踏襲した。第一に、テキストの構成を概観することで助動詞をどう扱っているのか探る。どの助動詞をどこまで、どのように説明しているのか明らかにしたい。第二に、各助動詞を導入する際に用いられる例文を取り上げ、『日語古典語法』で扱う例文が日本語学習者への配慮がなされているのか考察する。どのような例文をいくつ学習者に提示しているのか、例文の出典に特徴はあるか、使用する例文に問題はないのか、春口(2008b、2009)の結果を踏まえながらその特徴について言及する。

¹⁾ 王雪松編(2005)『日本語古典文法』武漢大学出版社

²⁾ 梁海燕編(2006)『簡明日本語古文教程』華東理工大学出版社

³⁾ 鉄軍編(2006)『日語古典語法』北京大学出版社

3. テキスト構成

3. 1 テキスト全体における助動詞の位置づけ

『日語古典語法』は品詞ごとに章立てされており、助動詞は「第六章 助動詞（一）」「第七章 助動詞（二）」で紹介されている。各章に二分して紹介された助動詞とその提出順は、下表（次頁、表1）の通りである。

第六章冒頭では、活用の種類ごとに助動詞を分類した表を紹介している（p.61）。第六章、第七章で扱う助動詞がこの表で一覧できるが、次頁から続く個別の助動詞紹介の提出順には何ら反映されてはいない。また『日本語古典文法』、『簡明日本語古文教程』が活用の型、接続、意味ごとに助動詞を分類したことを思えば、『日語古典語法』は助動詞を全体的に俯瞰することには、あまり留意していないと言えるだろう。

表1：助動詞の提出順

第六章 助動詞（一）	第七章 助動詞（二）
1. [き・けり] 過去助動詞	13. [る・らる] 受身（被動）助動詞
2. [たり・り] 完了助動詞	14. [す・さす・しむ] 使役尊敬助動詞
3. [ぬ・つ] 完了助動詞	15. [ず] 打消（否定）助動詞
4. [む（ん）・むず（んず・うず）] 推量助動詞	16. [じ] 打消推量助動詞
5. [べし・めり] 推量助動詞	17. [まじ] 否定（打消）推量助動詞
6. [まし] 半実仮想助動詞	18. [まほし] 希望助動詞
7. [らし] 推量助動詞	19. [たし] 希望助動詞
8. [らむ（らん）] 現在推量助動詞	20. [ごとし] 比喩（比況）助動詞
9. [けむ（けん）] 過去推量助動詞	21. [やうなり] 比喩（比況）助動詞
10. [なり ₁] 断定助動詞	
11. [なり ₂] 伝聞推定助動詞	
12. [たり] 断定助動詞	

また『日本語古典文法』、『簡明日本語古文教程』との大きな違いは、練習問題の有無にある。『日語古典語法』では解説を主としており、巻末の付録として著名な古典文学の一説を抜き出して紹介するものの、文法項目の定着を目的とした練習問題は皆無である。

3. 2 助動詞の取り扱い（「まし」を一例として）

『日語古典語法』がどこまで、どのように助動詞を紹介しているのだろうか。半実仮想の助動詞「まし」を例に確認したい。

助動詞「まし」は「半実仮想助動詞」とあるとのラベル付けされているが、そもそも「反実仮想」とは何であるか、まず概念の理解が図られている。この次に接続、すなわち「まし」の直前に現れる用言の活用形が何であるかについて触れている。そして「まし」が持つ三つの意味（1. 仮想的推量、2. 仮想的適当、3. 包含猶豫的意志）を列挙し、それぞれ説明を施している。ここまで、説明はすべて中国語でなされている。また「まし」の活用は、これに続いて活用表の形でまとめて紹介している。

この後に例文と訳文が列挙される。ここでは一変して中国語を介さず日本語のみで紹介している。

「まし」の例文はここで三例確認できる。上述の三つの意味ごとに一例ずつ配されているが、「仮想的推量」といった意味の分類が明示されているわけではなく、助動詞がそれぞれの例文の中で果たす役割は読者が訳文から判断しなければならない。

さらに要点として「"まし"的演変」「半実仮想」「仮想背景下的推量」「仮想背景下的"適当"」「包含猶豫語氣的意志」「"まし"的用法」と題する補足説明が続く。「まし」にはなかったものの、助動詞によってはこれら補足事項の中でも例文が紹介されることがある。ここでも説明は中国語で行われている。

3. 3 考 察

『日本語古典文法』、『簡明日本語古文教程』との大きな違いは、中国語によって説明がなされている点である。学習者の母語での説明は、誤解を最大限防ぐことにつながるが、古典日本語文法の学習のメリットをイマージョン教育に求めるのであれば、これは障害となってしまう。

また「要点」に設けられた補足事項が多く、学習項目の幅の広いことがうかがえる。補足事項の内容は助動詞によってまちまちであるが、分類上同じ意味として括られた助動詞の違いを示したり、識別する際の手掛かりを紹介したりするなどは、『日本語古典文法』にも『簡明日本語古文教程』にも共通して見られた点である。

『日語古典語法』の補足事項の特色としては、すべての助動詞に共通して設けられた「演変」が挙げられる。これは助動詞の成り立ちや時代ごとの変遷、そして現代日本語との関連性について言及したものである。現代日本語とどう関連するのかわかることは、学習動機を高めることが期待できるし、現代日本語の理解を促進する点でも有用であろう。しかし、上代から中古、中世、さらに近世とあまりに情報量が多く、日本語学習者の入門書としては適当かどうか検討の余地がある。

4. 『日語古典語法』の提示する例文

4. 1 例文数

『日語古典語法』が提示している例文を助動詞ごとにまとめた(表2)。例文の総数は、170例を確認することができた。

表2：例文数

助 動 詞	例文数	助 動 詞	例文数	助 動 詞	例文数
き	6	べし	10	る・らる	9
けり	3	めり	3	す・さす・しむ	17
(けらずや)	1	まし	3	ず	13
たり	5	らし	5	じ	6
り	3	らむ	9	まじ	6
ぬ	8	けむ	4	まほし	9
つ	4	なり	6	たし	5
む	6	なり	5	ごとし	6
むず	6	たり	7	やうなり	5

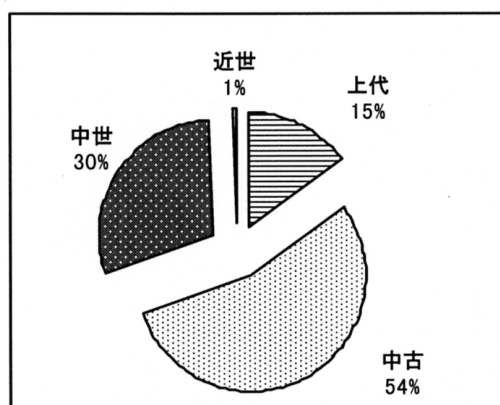
原則として助動詞が複数の意味を持つ場合にはその意味の分類ごとに1文ずつ例文を紹介していた『簡明日本語古文教程』と異なり、例文数に法則はない。また助動詞の意味ごとに分類して例文を提示してもいない。さらに同じ意味であることからグループとしてまとめて扱われる助動詞（例えば、「使役尊敬助動詞」の「す」、「さす」、「しむ」）も、その例文が分けて紹介されることはない。

助動詞の例文としては「ず」の13例が最大であり、「けり」、「めり」、「まし」の3例との差が大きい（「けらずや」は「けり」の派生として挙げられているため、例外とする）。

4. 2 出典

例文はいずれも、全170例のうち168例が古典文学作品から抽出されたものであった。その時代区分は、中古（平安時代）が半数を超え、中世（鎌倉・室町時代）、上代（奈良時代）が続く。近世は『奥の細道』から1例のみ用いられている（図1）。

図1：例文出典の時代区分



さらに表3（次頁）に時代、出典作品名と例文の数をまとめた。作品別にその特徴を探ってみたい。

作品別に見たとき、最頻出であったのは『万葉集』（上代、24例）であった。しかし『万葉集』の例文数は重複した例を含むため、異なり語数では『徒然草』（中世）と同数の23例となる。つまり上代、中世の1作品でそれぞれ全体のおよそ14%を占めているのである。

上記2作品に続いて『竹取物語』（中古）と『古今集』（中古）が19例で並び、以下『平家物語』（中世、17例）、『伊勢物語』（中古、11例）と二桁の抽出例を認めることができた。これまでの6作品で計113例となり、全体の66%と、半数を大きく上回る。30作品から抽出されたといっても、そのうち14作品は1例用いられているのみであり、その出典には偏りのあることが分かる。

また出典作品の特徴として、『万葉集』、『古今集』など韻文を主とするものの多いことも挙げられる。韻文には「縁語」や「掛詞」、「枕詞」といった和歌に見られる特殊用法・表現が含まれるため、散文に比して学習者が文意を把握する上で負担が大きいと考えられる。助動詞の理解促進を図って紹介された例文として、十分機能を果たすことを期待するのは難しいであろう。

ところで『古今集』といってもその全てが和歌、すなわち韻文とは限らない。『古今集』であっても散文で書かれた箇所もある。また一方で、『源氏物語』などにも作中に和歌が多くみられる。そこで例文ごとに確認してみたところ、47例（28%）が韻文という結果になった。

表3：例文の出典

上 代		中 古		中 世		近 世	
作品数	例文数	作品数	例文数	作品数	例文数	作品数	例文数
古事記	1	伊勢物語	11	新古今集	1	奥の細道	1
万葉集 ⁴	24	宇治拾遺物語	2	古今著聞集	1		
		大鏡	1	為忠集	1		
		落窪物語	1	徒然草	23		
		蜻蛉日記	1	百人一首	1		
		源氏物語	9	平家物語	17		
		古今集	19	保元物語	1		
		後撰和歌集	2	方丈記	3		
		今昔物語	2	発心集	1		
		更科日記	3	無名草子	1		
		拾遺集	1				
		新続古今集	1				
		千載集	2				
		竹取物語	19				
		土佐日記 ⁵	7				
		大和物語	2				
		枕草子	9				
計	25	計	92	計	50	計	1

4. 3 課 題

例文数や出典とは別に、留意すべき問題点を本節では取り上げたい。『日語古典語法』で実際に用いられた例文を実例として分析を試みる。

例文) 世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし。

これは助動詞「き」学習のための例文である。『古今集』出典の和歌であるが、分かち書きをしていない(また、分かち書きをしていないことに関しては、散文も同様である)。韻文であることの負担に加えて、これは学習者の理解を妨げる要素になるのではないだろうか。この点に加えて、韻文であるにもかかわらずその末尾に句点を施している点も表記の上から不適當であろう。

また『日語古典語法』が提示する例文には、表記に関する誤用が3例挙げられる。以下に取り上げて、その誤りを指摘する。

誤用1) 一生の恥じ、これに過ぐるはあらじ。

誤用2) 「もののあわれは秋こそまされ」と、人ごとに言ふめれど……。

誤用3) 盛公いまだ安芸守たりし時……。

⁴ 同じ例文を繰り返し使用したものも含む(1例)。

⁵ 『万葉集』同様、重複して用いられた例文1例を含む。

例文1では、「恥」のあとに不要な仮名をつけてしまった。例文2は仮名の誤りであり、正しくは「あわれ」ではなく「あはれ」としなければならない。また例文3は「清盛公」とすべきところ、「清」を書き忘れてしまったのだろう。

さらに、前掲の例文をみると助動詞の「まし」が末尾に使われている。「き」は一番最初に提出される助動詞であり（表1参照）、当然この時点で「まし」は未習である。未修得の学習項目を例文に含めてしまっただけでは、その質を問われるだろう。

4. 4 考 察

上述の『日語古典語法』の特徴、あるいは問題点を先行研究で調査対象とした『日本語古典文法』、『簡明日本語古文教程』と比較しながら考察したい。参考としてそれぞれの出典別例文数を表4、5にまとめた。

例文数については『日本語古典文法』が76例（春口2008b）、『簡明日本語古文教程』が73例（春口2009）であったが、『日語古典語法』はその2倍を優に超える。前二者に比して数多くの例文を供給していることが分かる。しかし、韻文が多く、また分ち書きをしていないこと、少ないながらも表記上の誤用があることは、『簡明日本語古文教程』では見られなかっただけに看過できない。古典日本語文法はインプットの機会が限定されるため、現代日本語以上に知識の供給源として教科書の存在は重要である。特に海外では教科書以外に少なくとも古典日本語文法学習のための例文と接する機会がないことを編著者は意識することが必要であろう。

表4：例文の出典（『日本語古典文法』）

上 古		中 古		中 世	
作 品 数	例文数	作 品 数	例文数	作 品 数	例文数
万 葉 集	7	伊 勢 物 語	3	源 平 盛 衰 記	1
		宇 治 拾 遺 物 語	1	新 古 今 集	1
		大 鏡	4	太 平 記	1
		源 氏 物 語	5	徒 然 草	14
		古 今 集	4	平 家 物 語	11
		今 昔 物 語 集	1	保 元 物 語	1
		更 級 日 記	3	方 丈 記	1
		竹 取 物 語	6		
		土 佐 日 記	4		
		枕 草 子	8		
計	7	計	39	計	30

表5：例文の出典（『簡明日本語古文教程』）

中 古				中 世	
作 品 数	例文数	作 品 数	例文数	作 品 数	例文数
和泉式部日記	1	竹取物語	9	太平記	1
伊勢物語	5	堤中納言物語	2	徒然草	24
宇治拾遺物語	1	土佐日記	3	平家物語	2
宇津保物語	1	浜松中納言物語	1	保元物語	1
古今集	4	枕草子	7	方丈記	1
今昔物語集	1	大和物語	1		
更級日記	8				
計			44	計	29

中古・中世のほか、上代の作品からの抽出も多いことは、「上代の助動詞はその時代でのみ使用された特殊なものであると位置付けられる。(中略) 入門段階での学習項目に掲げることを再考してもよい」とする春口(2008b)を踏まえれば、「古文の基礎課程」であるとする前言に適合しているとは言いがたい。

さらに『日本語古典文法』、『簡明日本語古文教程』と共通する問題点であるのが、例文に未習項目を含めてしまった点である。「これでは、理解、定着は覚束ない(春口2008b)」であろう。

5. まとめ

『日語古典語法』の例文数が抜きん出て多い。しかし、非母語話者を対象とした導入テキストとして改善・改良すべき余地は大きい。

総じて『日語古典語法』はその前言に反して専門性が高く、情報量も多いため、非母語話者のための「基礎的な課程」とは位置付け難い。まず多様な時代区分の文学作品から例文が抽出されている点、中でも上代からの出典が数多い点は、それに伴い学習項目が増大するため、入門書として相応しくない。また例文中に多くの韻文が含まれている点は『日語古典語法』を特徴付けるものであるが、韻文であるために新たな学習項目が多く生じるため、助動詞習得のための例文としては相応しくないだろう。

表記上のミスが見られる点、例文に未習項目が含まれる点は、『日本語古典文法』、『簡明日本語古文教程』にも共通する課題である。一方で『日語古典語法』のみが練習問題を全く設けていなかったが、説明と例だけでは新知識を定着させることは難しいだろう。

また例文とその訳文以外が全く中国語ばかりで記述されているというのも、再考すべき点である。これも練習問題同様、『日語古典語法』のみに当てはまる問題であったが、古典日本語の学習者は高等教育機関において日本語を専攻する学習者を専らとしており、『日語古典語法』もまた対象をそこに向けて編纂されていることは前言から明らかである。学習者にとって、まず身につけるべきは現代の日本語であり、古典日本語文法を日本語教育から独立して考えることはできない。例えば説明に現代日本語で行うことで、古典日本語文法に現代日本語のイメージ教育としての可能性を持たせることもできる。

『日語古典語法』もまた『日本語古典文法』、『簡明日本語古文教程』同様に、非母語話者へのテキ

ストとしては課題を多く含むことがわかった。このことは、古典日本語文法が中国・高等日本語教育カリキュラムに挙げられているにもかかわらず、軽視されていることの証左となるであろう。カリキュラムから古典日本語文法を削除するのでなければ、その教材、そして教授法を改善・改良し、学習者により適したものを提供しなければならない。そのためにも、日本語教育、或いは第二言語習得の分野で培われた諸理論を反映させ、古典日本語教育研究を展開させていくことが求められるだろう。

主要参考文献

- 金山泰子(2004)「上級学習者のための文語文法入門」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』27、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター、41-62頁
- 間英・岡崎智己(2003)「華僑大学における日本語教育 -中国における学部生日本語教育課程を考える-」『九州大学留学生センター紀要』13、九州大学、1-10頁
- 鈴木宣行(1991)「北京第二外国語学院における実践的外国語教育 -日本語学科の学習指導を通して-」『創価大学別科紀要』5、創価大学、23-51頁
- 立松喜久子(2000)「文語文法を教える 外国人上級者のための古典入門授業」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』23、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター、1-24頁
- 湯麗敏(1989)「中国復旦大学国際政治学部における日本語の教育」『創価大学別科紀要』4、創価大学、72-77頁
- 春口淳一(2006)「非母語話者を対象とした古典文法授業の実践報告 -学習者のモチベーション向上を目指した取り組み-」『中国日語教育理論与实践研究』吉林大学出版、56-66頁
- 春口淳一(2007)「非母語話者が古典日本語文法を学習する際の問題点 -現代日本語訳におけるミステイク分析から-」『長崎外大論叢』11、長崎外国語大学・長崎外国語短期大学、109-122頁
- 春口淳一(2008a)「日本語学習者と古典日本語文法 -学習者が求めるもの・学習者に求められるもの-」2008年度日本語教育学会第2回研究集会発表資料
- 春口淳一(2008b)「日本語学習者を対象とする古典日本語文法テキストの課題 -武漢大学出版社『日本語古典文法』を例として-」『長崎外大論叢』12、長崎外国語大学・長崎外国語短期大学、71-84頁
- 春口淳一(2009)「日本語学習者を対象とする古典日本語文法テキストの課題(2) -華東理工大学出版社『簡明日本語古文教程』を例として-」2009年度日本語教育学会第1回研究集会発表資料

資料：助動詞別例文・出典一覧

助動詞	例 文	出 典
き	死にし子、顔よかりき。	土 佐 日 記
	ある時は糧尽きて、草の根を食べ物としき。	竹 取 物 語
	吾妹が植ゑし梅の樹見ること心むせつつ涙し流る。	万 葉 集
	世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし。	古 今 集
	わが園の咲きし桜を見渡せばさながら春の錦延へけり。	為 忠 集
	吾妹子が植ゑし梅の樹みること心むせつつ涙し流る。	万葉集(再出)
けり	いまは昔、竹取の翁といふものありけり。	竹 取 物 語
	面影の霞める月ぞ宿りける春や昔の袖の涙に。	新 古 今 集
	田子の浦ゆうちいでて見ればま白にそ富士の高嶺に雪はふりける。	万 葉 集
けらずや	梅の花咲きたる園の青柳はかづらにすべくなりけらずや。	万 葉 集
たり	三寸ばかりなる人、いとうつくしうて居たり。	竹 取 物 語
	これしばし待ちたまひたれ。	大 和 物 語
	五条なる家たづねておはしたり。	源 氏 物 語
	……紫立ちたる雲の細くたなびきたる。	枕 草 子
	重き鎧の上に、重きものを負うたり抱いたりして……。	平 家 物 語
り	女のはける下駄にて作れる笛には、秋の鹿、必ず寄る。	徒 然 草
	春日野はけふはな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれり。	古 今 集
	あたら月の夜と花とを同じくはあわれ知れらむ人に見せ場や。	後 撰 集
ぬ	花の色は移りにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに。	古 今 集
	秋の野に人まつ虫の声すなり	古 今 集
	秋来ぬと目には清かに見えねども風の音にぞおどろかれぬる。	古 今 集
	船に乗りなむとす。	土 佐 日 記
	白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬ揺られければ……。	平 家 物 語
	散りぬれば恋ふれどしるしなきものを今日こそ桜折らば折りてめ。	古 今 集
	はや舟に乗れ、日も暮れぬ	伊 勢 物 語
今日には見えぬ鳥なれば……。	伊 勢 物 語	
つ	ほととぎす鳴きつる方をながむればただ有明の月ぞ残れる。	千 載 集
	わが弓の力は、龍あらば、ふと射殺して、首の玉は取りてむ。	竹 取 物 語
	※現代語に残る例を提示「追いつ追われつの好試合」	—
	僧都(舟に)乗りては降りつ、降りては乗りつ……。	平 家 物 語
む	わが宿の池の藤なみさきにけり山ほととぎすいつか来鳴かむ。	古 今 集
	名にし負はばいざ言問はむみやこどり我が思ふ人はありやなしやと。	伊 勢 物 語
	心あらん友もがな。	徒 然 草
	わが宿の花橋にほととぎす今こそ鳴かめ友にあへるとき。	万 葉 集

む	一生の恥じ、これに過ぐるはあらじ。	竹取物語
	言はむすべせむすべ知らず極りて貴きものは酒にしあるらし。	万葉集
むず	かのもとの国より、迎へに人々まうで来むず。	竹取物語
	さる所へまからむずるも、いみじくはべらず。	竹取物語
	いづちもいづちも足の向きたらむ方へ往なむず。	竹取物語
	やがて帰らうずるぞ。	平家物語
	敵すでに寄せたるに方々の手分けをこそせられむずれ。	保元物語
	何事を言ひても、「そのことさせむとす」「言はむとす」「なにとせむとす」と言ふ「と文字」を失ひて、ただ「言はむずる」「里へ出でむずる」などと言へば、やがていとわろし。まいて文に書いてはいふべきにもあらず。	枕草子
べし	潮満ちぬ。風も吹きぬべし。	土佐日記
	舟に乗るべき所へ渡る。	土佐日記
	人のがりいふべきことありて文をやる。	徒然草
	この一矢に定むべしと思へ。	徒然草
	濁れる酒を飲むべくあるらし。	万葉集
	これは汝が髻と思ふべからず。主が髻と思ふべし。	平家物語
	羽なければ、空を飛ぶべからず。	万葉集
	死ぬべけむや	今昔物語集
	雲の上まで往ぬべくは	伊勢物語
	ひぐらしの鳴きぬる時は女郎花咲きたる野辺をいきつつ見べし。	万葉集
めり	「……子になり給ふべき人なるめり。」とて……。	竹取物語
	絶えずさしのぞき気色見るものどもを、笑ふべかめり。	枕草子
	「もののあわれは秋こそまされ」と、人ごとに言ふめれど……。	徒然草
まし	梅が香を袖にうつしてとどめてば春は過ぐともかたみならまし。	古今集
	見る人もなき山里の桜花ほかの散りなむ後ぞ咲かまし。	古今集
	秋の野に道もまだひぬまつ虫の声する方に宿やからまし。	古今集
らし	春過ぎて夏来たるらし白たへの衣干したり天の香具山。	万葉集
	この川にもみち葉流る奥山の雪解の水ぞ今まさるらし。	古今集
	抜き乱る人こそあるらし白玉の間もなくも散るか袖のせばきに。	古今集
	立田川色紅になりにけり山の紅葉ぞ今は散るらし。	後撰集
	香具山、畝傍山、雄雄しと耳梨と相争ひき、古も然にあれこそうつせみも孀を争ふらしき。	万葉集
らむ	憶良らは今はまからむ。子泣くらむ。それ彼の母も吾を待つらむぞ。	万葉集
	久方の光のどけき春の日に静心なく花の散るらむ。	古今集
	命をかけて、何の契りに、かかる目をみるらむ。	源氏物語
	古に恋ふらむ鳥はほととぎすけだしや鳴きし吾が念へるごと。	万葉集

らむ	蓬萊といふらむ山に逢ふやと浪に漕ぎ漂ひありきて……。	竹 取 物 語
	目をくばりて読みみたるこそ、罪や得らむとおぼゆれ。	枕 草 子
	心ならむ人	徒 然 草
	つゆ違はざらむと	徒 然 草
	向かひるたらむ	徒 然 草
けむ	唐めいたる装ひは、うるわしうこそありけめ。	源 氏 物 語
	我を待つと君が濡れけむあしびきの山のしづくにならましものを。	万 葉 集
	ものかはと君が言ひけむ鳥の音の今朝もしもなどか悲しかるらむ。	古 今 集
	別れなばうら悲しけむ	万 葉 集
なり ₁	今日には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。	伊 勢 日 記
	乳母なる人は、男などもなくして……。	更 科 日 記
	男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。	土 佐 日 記
	吉野なる菜摘みの川の川淀に鴨ぞ鳴くなる山陰にして。	万 葉 集
	今日もかも京なりせば見まく欲り……。	万 葉 集
	駿河なる宇津の山辺……。	伊 勢 物 語
なり ₂	秋風に初雁がねぞ聞こゆる誰がたまづさをかけて来つらむ。	古 今 集
	皆人は花の衣になりぬなり苔のたもとよ乾きだにせよ。	古 今 集
	葦原の中つ国はいたくさやぎてありなり。	古 事 記
	男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。	土佐日記(再出)
	華やかなりしあたりも人すまぬ野らとなり……。	徒 然 草
たり	清盛、嫡男たるによって、その跡を継ぐ。	平 家 物 語
	兄人たる人、外より来て……。	蜻 蛉 日 記
	なかなか人にあらずは酒壺になりにてしかも酒に染みなむ。	万 葉 集
	晋の王儉、大臣として、家にハスを植ゑて愛せし時の樂なり。	徒 然 草
	盛公いまだ安芸守たりし時……。	平 家 物 語
	かくて明けゆく空の気色昨日に変わりにたりとは見えねど……。	徒 然 草
	岸打つ波も茫茫たり。	平 家 物 語
る らる	この間に使われむとてつきて来る童あり。	土 佐 日 記
	(平貞盛は) 前に父国香を将門に討たれにければ、その家の怨を報ぜむとて…。	今昔物語集
	ありがたきもの、しうとにほめらるる婿。	枕 草 子
	折々のこと思ひ出で、よよと泣かれ給ふ。	源 氏 物 語
	住み慣れしふるさと限りなく思ひ出でらる。	更 科 日 記
	東人こそ、言ひつることは頼まるれ。都の人はことうけのみよくて、まことなし…。	徒 然 草
	涙のこぼるるに、目も見えず、ものも言はれず。	伊 勢 物 語
	御こちはいかがおぼさると問へば……。	竹 取 物 語

る らる	上人、馬引き返して逃げられにけり。	徒然草	
す さす しむ	妻の嫗にあづけて養はす。	竹取物語	
	浪に足うち洗はせて露にしをれてその夜はそこにぞ明かされける。	平家物語	
	月の都の人まうで来ば、捕らへさせむ。	竹取物語	
	愚かなる人の目をよろこばしむる楽しみ、またあぢきなし。	徒然草	
	人々を召して、歌を奉らしめ給ふ。	古今集	
	この玉取りえでは、家に帰り来な。とのたまはせけり。	竹取物語	
	かの贈り物御覧ぜさす。	源氏物語	
	つゆまどろまれず、明かしかねさせ給ふ。	源氏物語	
	十五日の夜、一院第二の皇子、ひそかに入寺せしめ給ふ。	平家物語	
	駅の長のいみじく思へる気色を御覧じて、作らしめ給ふ詩、いとかなし。	大鏡	
	敵の心胆を寒からしめる。	—	
	朝廷よりも多く物賜はす。	源氏物語	
	この花の散るを惜しうおぼえさせたまふか。	宇治拾遺物語	
	薬の壺に御文そへて参らす。	竹取物語	
	人びとに歌詠ませたまふ。	伊勢物語	
	浪に足うちあらわせて……。	平家物語	
	浪に足をうち洗われたまま……。	平家物語	
	ず	その主とすみかと無常を争うさま、いはば朝顔の露に異ならず。	方丈記
		昔の直衣姿こそ忘れね。	無名草子
たよりあらんことは憚らずのたまはせよ。と言はせたりければ……。		発心集	
思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢としりせば覚めざらましを。		古今集	
鏡に色、形あらましかば、映らざらまし。		徒然草	
ますらをと思へる吾も草枕旅にしあれば思ひ遣るたずきを知らに。		万葉集	
立ちしなふ君が姿を忘れずは……。		万葉集	
秋立ちて幾日もあらねばこの寝ぬる朝明の風は袂寒しも。		万葉集	
わが命も常にあらぬか昔見し象の小河を行きて見むため。		万葉集	
山川に風のかけたる柵は流れもあへぬ紅葉なりけり。		百人一首	
契りおきしさせもが露を命にてあれば今年の秋もいぬめり。		千載集	
嘆きつつ一人ぬる夜のあるまはいかに久しきものとかは知る。		拾遺集	
じ	京に見えぬ鳥なれば	伊勢物語	
	月ばかりおもしろきものはあらじ。	徒然草	
	「京にあらじ、東の方に住むべき国求めに。」とて行きけり。	伊勢物語	
	言ひ続ければ、みな源氏物語・枕草子などにことふりにたれど、同じこといまさらに言はじともならず。	徒然草	
我を除きて人はあらじと誇ろへど……。	万葉集		

じ	幾世もあらじ我が身をなぞもかく海人の刈る藻に思ひ乱るる。	古今集
	人はなどお訪はで過ぐらむ風にこそ知られじと思ふ宿の桜を。	新統古今集
まじ	冬枯れの景色こそ秋にはをさをさ劣るまじけれ。	徒然草
	かぐや姫は重き病をし給へば、え出ておはしますまじ。	竹取物語
	ただいまは見るまじ。とて入りぬ。	枕草子
	ししたる事のけふ過ぐすまじきをうちおいて……。	枕草子
	三日は、このものはほかへは持ていくまじ。	落窪物語
	たはやすく人寄り来まじき家をつくりて……。	竹取物語
まほし	愛嬌ありて、言葉多からぬこそ、飽かず向かはまほしけれ。	徒然草
	かぐや姫を見まほしうて物も食はず思ひつつ……。	竹取物語
	少しのことに先達はあらまほしきことなり。	徒然草
	言はまほしからぬこと。	源氏物語
	筆策はいとかいがなく……うたてけ近く聞かまほしからず。	枕草子
	この生絹だにいと所せく暑かはしく、取り捨てまほしかりしに……。	枕草子
	心のうちにはあらまほしかるべき御事どもをと、思へど	源氏物語
	いと恋しければ行かまほしく思ふに……。	更科日記
もし誠に聞こし召し果てまほしくは……。	大和物語	
たし	敵に逢うてこそ死にたけれ、悪所に落ちては死にたからず。	平家物語
	「今一度対面してまうしたきことのあるは、いかがすべき。」とのたまへば……。	平家物語
	家にありたき木は松、桜……。	徒然草
	聞きたく思さむときは憚り給ふべからず。	古今著聞集
	八島へ帰りたくは、一門の中へ言い送って、三種の神器を都へ返し入れ奉れ。	平家物語
ごとし	ついに本意のごとくあひにけり。	伊勢物語
	松島は笑ふのごとく、象潟は憎むのごとし。	奥の細道
	世の中にある人とすみかと、またかくのごとし。	方丈記
	梅の花今咲けるごとく散り過ぎずわが家の園にありこそぬかも。	万葉集
	和歌、管弦、往生要集ごときの抄物を入れたり。	方丈記
	当時のごとくは源氏の郎等どもこそ候ふなれ。	平家物語
やうなり	雨の降るやうに射けれども……。	平家物語
	心惑はすやうに、返り言したる、よからぬことなり。	徒然草
	世の人の飢得ゑ寒からぬやうに、世をば行はまほしきなり。	徒然草
	思ひつるやうにもあるかな。	竹取物語
	心なしの乞児とはおのれがやうなる物をいふぞかし。	宇治拾遺物語